

# 経済・金融 フラッシュ

## 鉱工業生産 12 年 1 月 ～生産は足踏み状態から脱却へ～

経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎

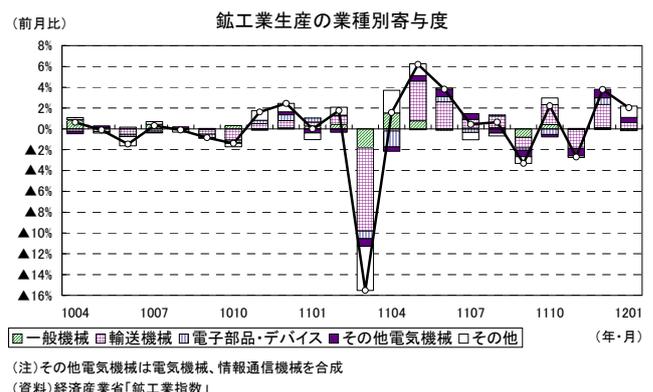
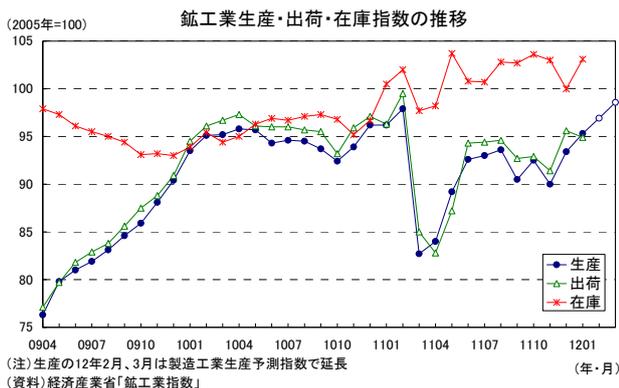
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

### 1. タイの洪水による供給制約の緩和から2ヵ月連続の上昇

経済産業省が 2 月 29 日に公表した鉱工業指数によると、12 年 1 月の鉱工業生産指数は前月比 2.0%と 2 ヶ月連続で上昇し、事前の市場予想（QUICK 集計：前月比 1.5%、当社予想は同 1.2%）を上回った。出荷指数は前月比▲0.7%と 2 ヶ月ぶりの低下、在庫指数は前月比 3.1%と 3 ヶ月ぶりの上昇となった。

1 月の生産を業種別に見ると、タイの洪水に伴う供給制約の緩和から 12 月に高い伸びを記録した輸送機械（12 月：前月比 13.2%→1 月：同 3.3%）、情報通信機械（12 月：前月比 34.8%→1 月：同 12.0%）が引き続き生産全体を大きく押し上げる形となった。輸送機械は洪水による部品不足の解消に加え、米国向けを中心に輸出が持ち直していること、エコカー補助金再開の効果などから国内の自動車販売が好調であることも追い風となっている。一方、海外経済減速に伴う輸出の低迷を背景に一般機械は前月比▲0.3%の低下、在庫調整の進展から 12 月に前月比 7.0%の高い伸びとなった電子部品・デバイスは前月比▲1.3%の低下となった。

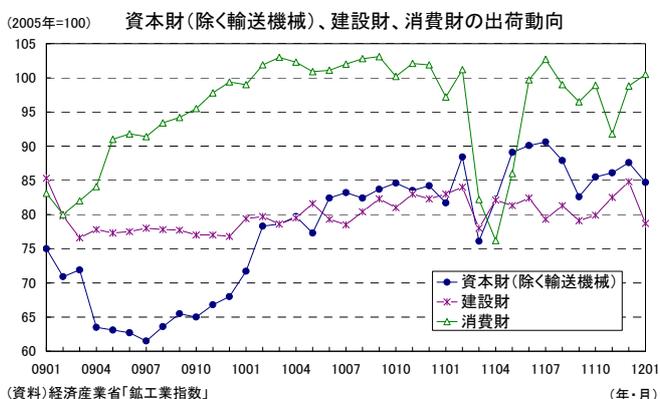
速報段階で公表される 16 業種中、12 業種が前月比で上昇、4 業種が低下となった。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は 11 年 10-12 月期の前期比▲0.7%の後、12 年 1 月は前月比▲3.3%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は 11 年 10-12 月期の前期比 3.1%の後、12 年 1 月は前月比▲7.2%となった。GDP 統計の設備投資は、震災後に手控えられていた投資の再開、毀損した生産設備の修復などから 11 年 10-12 月期に前期比 1.9%と 5 四半期ぶりの増加となった。12 年 1-3 月期の設備投

資は、復旧投資が引き続き押し上げ要因となることが見込まれる一方、輸出の低迷に伴う企業収益の悪化が下押し要因となるため、増加基調は維持されるものの伸びは鈍化する可能性が高い。

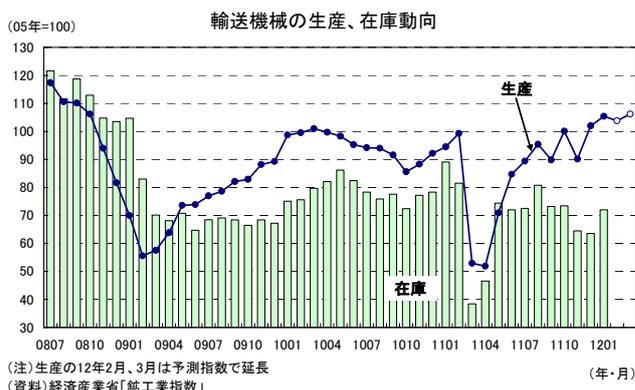
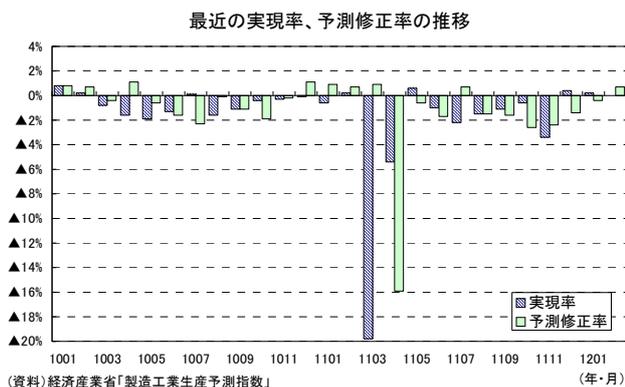
消費財出荷指数は11年10-12月期に前期比▲2.9%となった後、12年1月は前月比1.7%となった。耐久消費財が前月比1.9%、非耐久消費財が同0.7%であった。耐久消費財のうち、液晶テレビは地上デジタル放送移行後の販売低迷が長期化しているが、自動車販売の好調がそれを補う形となっている。GDP統計の個人消費は11年4-6月期から10-12月期まで3四半期連続で前期比増加となったが、鉱工業指数から確認される財消費の好調に加え、旅行、外食などのサービス消費も回復の動きが続いているため、12年1-3月期も明確な増加となることが予想される。



## 2. 生産は足踏み状態から脱却へ

製造工業生産予測指数は、12年2月が前月比1.7%、3月が同1.7%となった。生産計画の修正状況を示す実現率(1月)、予測修正率(2月)はそれぞれ0.2%、0.7%であった。実現率、予測修正率がともにプラスとなったのは、東日本大震災前の11年2月速報時以来ほぼ1年ぶりのことである。

円高の進展、海外経済の下振れ、タイの洪水の影響から昨年夏場以降、生産計画の下方修正が続いてきたが、タイの洪水による供給制約が解消されたことで下振れの流れに歯止めがかかる形となった。



予測指数を業種別に見ると、直近2ヵ月で50%を超える高い伸びとなった情報通信機械は2月にはその反動もあり前月比▲9.2%と大きく落ち込むが、3月には同13.9%の高い伸びが見込まれている。また、在庫調整が続いてきた電子部品・デバイスは、1月には前月比▲1.3%と3ヵ月ぶりに低下したものの、2月は前月比12.9%、3月は同1.9%と強めの計画となっている。同業種は生産計画が修正されやすい傾向があることには留意が必要だが、2月の実現率(2.6%)、3月の予測修正率(4.1%)がともにプラスとなったことは明るい材料と言えるだろう。一方、すでに震災前の

水準を回復している輸送機械は2月が前月比▲1.5%、3月が同2.3%と先行きは一進一退の動きが見込まれている。

12年1月の生産指数を2月、3月の予測指数で先延ばしすると、12年1-3月期の鉱工業生産は前期比5.4%の上昇となる。また、2月、3月の予測指数の伸びが実現すれば、生産指数の水準は3月には震災前（11年2月）を上回ることになる。

引き続き、海外経済、為替、原油など外部環境の悪化によって下振れするリスクはあるものの、今月の結果は鉱工業生産が昨年夏場以降の足踏み状態から脱却しつつあることを示したものと評価することができるだろう。

---

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保證するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。